

5 年度 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日

法人名

園名

育生会

こばとこども園

まとめ

全体平均

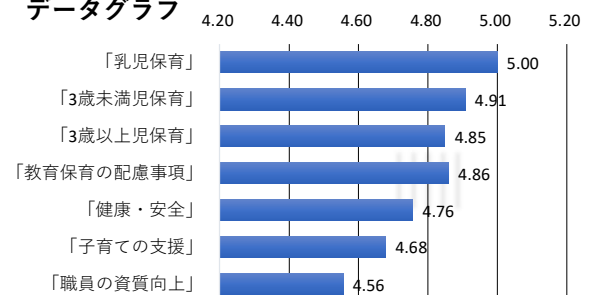
4.83

第2章第2節 乳児期の園児の保育	一人ひとりの発達に合った生活のリズムの中で、愛情豊かに応答的に保育が行われ、健やかにのびのびと育つことが出来ている。保護者アンケートを見てもおおむね良い評価を得ているが、身近なものとの関わりについて否定的な感想もあったため、改善できるところは改善するとともに、ドキュメンテーションを工夫しながら、保護者には乳児期の園児の保育の内容を引き続き丁寧に伝えていく。
第2章第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育	保育教諭は園児の生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに応答的に関わっている。また、子どもの発達に合わせ、子どもの遊びが広がるように様々な遊具や空間を用意していた。時期によって年長児との関わりや地域の人々への関わりや行事等の工夫が必要だ。
第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育	今年度は、子どもが自分で考えて自分で決めることを通して主体性を育むことを目的に、新たにサークルタイムを取り入れた。サークルタイムは、特に人間関係・言葉・表現の領域の発達に大きく寄与し、個の成長と集団としての活動の充実が図られた。活動内容については、多種多様に提案をし、ふさわしい経験の幅を広げることに留意する必要がある。
第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項	一人ひとりの発達及び発達状態や健康状態については、看護師や栄養士等の専門職と連携しつつ保育教諭の応答的な関わりを基本とし、適切な判断に基づく保健的な対応を行った。途中入園児についてならし保育で保護者との連絡を密に園の生活になじんでいくようにするとともに、他の園児に不安や動揺を与えないように配慮した。国籍や文化の違いについては外国籍の園児がいなくていいことを考えていけたら良い。
第3章 健康及び安全	全職員がそれぞれの専門性を生かしながら、組織として、園児の安全と安心を考えながら進めた。しかしながら、保護者アンケートでは職員同士の連携に対し低い評価もあり、保育の可視化をもう一步進める必要がある。健康支援ではほけん委員会を開催して、対応の平準化を目指した。食育の推進では、食育計画と活動が繋がっていないところの反省もあり改善を要する。災害への備えについては、取組事案であった引き渡し訓練を初めて行うことができた。
第4章 子育ての支援	園児の保護者に対する子育て支援及び地域における子育て家庭の保護者等に対する支援について、今後も既存の支援内容をアップデートしながら継続して行く。保護者アンケートで数件の意見があり、子どもの最善の利益に照らして、保護者の自己決定を尊重しながら、改善すべきところは改善して行きたい。また、こども誰でも通園制度試行的事業が始まるため、園全体で体制を構築していきたい。
第5章 職員の資質向上	毎日の保育内容のふりかえり、毎月の保育内容のふりかえり、年度の自己評価などで職員の話し合いに力を入れている。職員が話し合いをすることで、保育内容の共有はもちろん、保育の価値観のすり合わせができ、職員の質の向上に繋がっている。資質向上に不可欠な研修受講については、園内研修のさらなる充実と外部研修の自主的積極的な受講を促進したい。
総合	一昨年は全体平均4.40、昨年は全体平均4.77であった。今年度は、教育保育の実践内容で昨年より自己評価が高く、各職員が子どもの最善の利益を念頭に置き、常にブラッシュアップした結果と受けとめられる。今後も、現状に満足せずに幼保連携型認定こども園教育保育要領をさらに読み込み、新たな課題を見つけて改善していくことが大事である。「教育保育の配慮事項」「子育ての支援」については新たに課題が見つかり、改善に取り組みたい。また、それぞれの専門性を持った職員が年齢・立場・役割を超えて連携していくためには良好なコミュニケーションが欠かせない。そのために、継続して職場の心理的安全性を作っていく必要性を感じている。

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	15	5.00
「3歳未満児保育」	32	4.91
「3歳以上児保育」	53	4.85
「教育保育の配慮事項」	16	4.86
「健康・安全」	28	4.76
「子育ての支援」	14	4.68
「職員の資質向上」	9	4.56
計	167	4.83

データグラフ



領域別評価のまとめ【 第2章～第5章 】 (水色の「領域のまとめ」欄に入力して下さい)	
第2章 ねらい及び内容並びに配慮事項	
第1節 (前文のため省略)	
第2節 乳児期の園児の保育 平均 5	
1 健やかに伸び伸びと育つ(身体的発達)	
5.00	(B) 一人ひとりの生活リズムを整えながら情緒を安定させ、生理的にも心理的にも欲求が満たされるようにした。また安全に探索活動ができるように関わった。(リ) 早起きの子、早くから登園している子、又、月齢差にもよるが、昼食時間前に空腹を訴える子が多く、食事時間の調整が大変だった。(ウ) 保育者との信頼関係のもと、生理的、心理的欲求が満たされ安心して生活できていた。
2 身近な人と気持ちが通じ合う(社会的発達)	
5.00	(B) スキンシップ等で信頼関係を築き、安心して気持ちを表現できるよう関わり、いろいろな人との触れ合いが楽しいと感じるようにした。(リ) コロナの5類移行後、マスクを外しての生活が戻りつつあったが、感染症が増えてくと再びマスクをするようになり、視覚からの言葉の獲得が難しくなった。(ウ) 応答的な関わりで、発語を促したり、伝えようとする意思をくみとったりしていた。
3 身近なものに関わり感性が育つ(精神的発達)	
5.00	(B) 音・色・形・手触りなどバリエーションのある玩具を選び、衛生面・誤飲に気を付け保育した。自ら好きな遊びに行動できるよう関わった。(リ) 戸外遊びができなくなってからも室内で様々な感触遊び、五感を刺激する活動を取り入れ、身体や情緒の発達を促した。(ウ) 周囲の身近なものへの興味関心を高めるために発達に合った環境を構成したり、様々なものに触れる機会を与えたりしていた。
2章2節 領域の まとめ	一人ひとりの発達に合った生活のリズムの中で、愛情豊かに応答的に保育が行われ、健やかにのびのびと育つことが出来ている。保護者アンケートを見てもおおむね良い評価を得ているが、身近なものとの関わりについて否定的な感想もあったため、改善できるところは改善するとともに、ドキュメンテーションを工夫しながら、保護者には乳児期の園児の保育の内容を引き続き丁寧に伝えていく。

第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育 平均 4.9	
1 健康	
4.95	(B) 安心して生活できる環境の中、生活リズムが整い、はう、歩く、登る、もぐる、くぐるなど様々な動きがのびのびとできるようになり達成感や喜びが持てるように関わった。(リ) 一人ひとりの発達に合わせた生活の流れや活動を検討し、実行した。(ウ) 戸外に出て体を十分に動かしたルールのある遊びを通して友だちと一緒に遊ぶ楽しさが感じられるようにした。身辺自立や清潔の心地よさについても繰り返し丁寧に知らせ1年を通して身につくように働きかけた。
2 人間関係	
4.78	(B) 欲求を満たされ、気持ちが安定し、様々な事をやろうとしたり、周りの友だちや年上の子の模倣が楽しめるよう見守った。(リ) 戸外遊びができなくなると異年齢で関わる機会が無くなった。週一回でも年長児と関わる時間を設け、触れ合ったり遊んだりできれば良かった。(ウ) 散歩で出会う地域の方、総合避難訓練でのボランティアの方々など地域の方と多少の接点はあったが、人の特性や多様性に気付くようにという点では実体験が乏しかったと感じた。
3 環境	
4.83	(B) 安全面に留意しながら室内外でいろいろな物を見たり触れたりできるようにした。発達により触れられる物もある為、保育者と共に感じられるようにしていく。(リ) 室内遊びが主となると身近な生き物(金魚以外)に触れる機会がなかった。(ウ) 季節に合わせて五感を刺激する遊びや活動をした。又、保育者自身が感覚を豊かにし、子どもの目線に立って、一緒に楽しむようにした。
4 言葉	
5.00	(B) 絵本や生活の中での言葉を意図的に取り入れ、身振りと共に表現できるようにした。名前を呼ぶことや繰り返しの言葉を使うことで発語が促されるようにした。(リ) 子どもが話そうとする意欲を見守り受容的に応じた。絵本や手遊び、言葉の響きを楽しむ機会をもっと増やしたい。(ウ) 毎日読み聞かせをしていたが、保護者には伝わっていないと感じたのでドキュメンテーションで配信しても良かった。
5 表現	

4.95	(B) 誤飲に気を付けながら素材を選び、いろいろな表現が楽しめるようにした。手遊びや歌は遊びの中で積極的に取り入れた。(リ) 発達や興味に応じた遊具を用意し、子どもの表現する遊びを一緒に楽しみ、そのイメージを広げるような関わりができた。(ウ) ごっこ遊びが広がるよう手作り遊具を用意し、再現遊びが楽しめるようにした。製作(表現)活動ははさみ、筆等の道具の使い方を知らせ、様々な手法で表現する事が楽しめるようにした。
2章3節 領域の まとめ	保育教諭は園児の生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに応答的に関わっている。また、子どもの発達に合わせ、子どもの遊びが広がるように様々な遊具や空間を用意していた。時期によって年長児との関わりや地域の人々への関わりや行事等の工夫が必要だ。

第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育		平均 4.84
1 健康		
4.70	(な) 戸外での遊びは十分に楽しんでいるが天候や配置人数により遊びに制限をかけてしまうことあった。自発的な遊びという観点から子どもたちと遊びを考えたり、天候による遊びを一緒にしてみるなどの関わりも必要だったと感じる。ウッドデッキ、ロフトなどうまく活用していきたい。	
2 人間関係		
4.77	(な) サークルタイムという活動の中で意見の食い違いもあったが少しずつ友だちへの理解が進み、気かけたり話し合おうとする様子が見られた。ピーステーブルを設置し、うまく活用出来るようにしていきたい。	
3 環境		
4.83	(な) 様々な自然という中で風や雨など天候によっても傘で外に出るなど、触れる感じる体験を増やしたいと感じた。STEMを活動の中にもうまく組み込むことができなかった。STEM教育のあり方や導入の仕方を考慮し、年齢に応じた興味関心を引きだしていきたい。	
4 言葉		
5.00	(な) 対話や子ども同士のやりとりが盛んに行われ、話したり聞いたり伝えたりする姿がやしなわれたように感じる。	
5 表現		
5.00	(な) 製作する事への意欲が芽生えていた。イメージを形にしたり想像力を育んだりする為に活動の中で連続性を持たせ継続的に遊びを楽しむ中で用具の扱い方についても知らせていきたい。	
2章4節 領域の まとめ	今年度は、子どもが自分で考えて自分で決めることを通して主体性を育むことを目的に、新たにサークルタイムを取り入れた。サークルタイムは、特に人間関係・言葉・表現の領域の発達に大きく寄与し、個の成長と集団としての活動の充実が図られた。活動内容については、多種多様に提案をし、ふさわしい経験の幅を広げることに留意する必要がある。	

第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項		平均 4.85
1 満3歳児未満の園児の保育の実施における配慮事項		
(1) 乳児期の園児の保育に関する配慮事項		
5.00	(B) 看護師・栄養士・職員間で個々の発育・発達を見ながら保育するようにした。保護者からの相談には専門ごとに応えるように配慮した。(リ) 保護者の育児不安に寄り添った応答や育ちの伝達において努力が必要な部分があった。(ウ) 朝の視診やコードモンの内容を職員同士で伝え合い、降園時には様子を口頭で伝えたり、コードモンで配信したりし、適切に対応するように心がけた。	

(2) 満1歳以上満3歳未満の園児の保育に関する配慮事項	
5.00	(B) 健康面に配慮しながら充分探索活動ができるようにし、危険の内容環境を整えた。(リ) 健康状態について保護者と連絡を取り合う中で、看護師とも相談し、必要な様子を伝えるようにした。(ウ) 職員間で一人一人の発達について、気付いた事や関わりを話し合い、共通理解の上で関わっていた。
2 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の全般における配慮事項	
4.63	(B) 個々の発達などの個人差を踏まえ、活動を見守り、全員が等しく保育されるよう配慮した。(リ) 個々の運動の発達に合わせて、程度や遊ぶ時間、スペースを分けて活動した。(ウ) 異なる文化の違いをどう伝えていくか。遊びや活動、食の中で文化に触れる機会を作れるように考えたい。
2章5節 領域の まとめ	一人ひとりの発育及び発達状態や健康状態については、看護師や栄養士等の専門職と連携しつつ保育教諭の応答的な関わりを基本とし、適切な判断に基づく保健的な対応を行った。途中入園児についてならし保育で保護者との連絡を密に園の生活になじんでいくようにするとともに、他の園児に不安や動揺を与えないように配慮した。国籍や文化の違いについては外国籍の園児がいない中で出来ることを考えていけたら良い。

第3章 健康及び安全 <u>平均 4.75</u>	
第1節 (前文のため省略)	
第2節 健康支援	
4.81	(B) 毎日のオムツ交換の際、アザや傷などをチェックし視診を心がけた。虐待などの疑いは無かったが、保護者との関わりもコドモンや送迎の際に取るように心がけた。(看) 園児の健康状態は、日々クラス担任と連絡を取り合い把握に努めている。病歴は毎月記録し、予防接種も保護者からの連絡を受け適宜記録している。新入園児はけいれん、アレルギー病歴の確認と共に母子手帳を借り、出生時から入園時までの健診などを確認、コピーを頂いている。けいれんの既往のある園児は一覧とし電話口に設置している。保健計画を立案し、その時期に適し、子どもの気付きとなる指導を行い健康増進に働きか
第3節 食育の推進	
4.64	(B) 離乳食の進み具合を定期的に確認し安全に食べることを楽しめるようにした。絵本などでも食べ物に親しめるようにした。(給) 菜園・ピクニックごっこ・クッキングなど継続して食に関わる体験を取り入れる。食育計画と活動が結びついていないものもあったため、こどもたちの日々の生活や遊びの中で展開されていくような食育計画を作成する必要がある。◎コロナが落ち着き、食育の内容については進歩があり、年度当初の目標であった食育計画のPDCAも機能させることが出来た。地域の関係機関等との連携にもう少し力を入れられたら良い。
第4節 環境及び衛生管理並びに安全管理	
4.78	(B) 毎日の遊具の消毒や部屋の清掃などで衛生面に気を付け午睡中もチェックするなどした。発達による事故にも気を付けるようにした。◎毎月の事故防止委員会のヒヤリハットが重要な役割を果たしている。事故防止や安全対策で必要と思われることは、漏れなく実施しているが、危機管理マニュアル等の定期的な見直しや職員への周知が課題である。
第5節 災害への備え	
4.77	(B) 安全点検を定期的に行い、他の職員とも協力するようにした。災害時には、他の職員にも協力してもらい、安全面に気を付けるようにした。◎避難出入口付近に物が置いてあったため、常時確認し、避難経路の安全を確保する必要がある。また、月1回の災害訓練では模擬消火訓練を忘れないようにしたい。
3章 領域の まとめ	全職員がそれぞれの専門性を生かしながら、組織として、園児の安全と安心を考えながら進めた。しかしながら、保護者アンケートでは職員同士の連携に対し低い評価もあり、保育の可視化をもう一步進める必要がある。健康支援ではほけん委員会を開催して、対応の平準化を目指した。食育の推進では、食育計画と活動が繋がっていないところの反省もあり改善を要する。災害への備えについては、取組事案であった引き渡し訓練を初めて行うことができた。

第4章 子育ての支援 <u>平均 4.67</u>	
第1節 (前文のため省略)	
第2節 子育ての支援全般に関わる事項	
4.88	保護者面談や保護者参加等で各家庭の実態等を踏まえて保護者支援を心がけたが、保護者の自己決定を尊重することについては、まだ改善の余地がある。また、令和6年度には「こども誰でも通園試行事業」が始まるため、地域の関係機関等の連携を強くしていきたい。

第3節 幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援	
4.40	コモンアプリで連絡帳、お知らせ、写真、動画などの配信を通じて、また保護者参加や行事参加などを通して、保護者との相互理解を図るように努めた。コロナ禍も落ち着き行事も以前のように行われるようになったが、保護者によっては保護者同士の関わりに消極的な方もおり、積極的に交流する機会をどのように保障するのが課題である。また、園児に発達上の課題が見られる場合、個別の支援についての取組も強化していく必要を感じている。
第4節 地域における子育て家庭の保護者等に対する支援	
4.80	地域における子育て家庭の保護者等に対する支援として、子育て広場（PIGEON MOTHERS CLUB）や放課後児童クラブ（PIGEON KIDS CLUB）を継続して実施している。来年度は、子育て広場の周知とこども誰でも通園制度試行的事業に力を入れ、地域において教育及び保育の中心的な役割の強化に努めたい。
4章 領域の まとめ	園児の保護者に対する子育て支援及び地域における子育て家庭の保護者等に対する支援について、今後も既存の支援内容をアップデートしながら継続して行く。保護者アンケートで数件の意見があり、子どもの最善の利益に照らして、保護者の自己決定を尊重しながら、改善すべきところは改善して行きたい。また、こども誰でも通園制度試行的事業が始まるため、園全体で体制を構築していきたい。

第5章 職員の資質向上 <u>平均 4.55</u>	
1 職員の資質向上に関する基本的事項	
5.00	職場研修及び外部研修を通じて、各職員は職務内容に応じた専門性を高めることができた。保育内容の自己評価は引き続き各クラスの話し合いに重きを置き二回実施した。今年度は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説本を全職員に配布し、解説本に即した自己評価となるようにした。
2 施設長の責務	
4.50	施設長として社会情勢を踏まえ、施設長自身の専門性を高める研修と園における教育保育の質を高める研修をそれぞれ受講した。また、職員については、時間的な制約が少ないリモート研修を中心に、現場に出向くことで学びが深まる対面研修も増やし、全職員に外部研修を受講してもらうことができた。
3 職員の研修等	
5.00	職場における研修は定型的な研修の他、職員の意見も聴きながら、実践的な研修を行った。特に職員間のコミュニケーションを高める研修や手作りおもちゃの研修の職員評価が良かったため続けて行きたい。外部研修については一人一研修以上を自分で選択して受講するように年度初めの目標設定で周知し、全員受講することができた。
4 研修の実施体制等	
4.00	今年度職員が自ら選択して外部研修を受けたが、計画的に研修を受けたとは言い難く、促されて受講する職員も少なく無かった。園としては、職員の自主性を尊重する体制は変えずに、年間トータルの研修内容の提示や年間目標に具体的に日時や内容を記入してもらうなどのサポートの必要性を感じた。また、保育実践など共有する必要のある研修については、研修報告書の回覧だけでなく報告会も積極的に開いていきたい。
5章 領域の まとめ	毎日の保育内容のふりかえり、毎月の保育内容のふりかえり、年度の自己評価などで職員の話し合いに力を入れている。職員が話し合いをすることで、保育内容の共有はもちろん、保育の価値観のすり合わせができ、職員の質の向上に繋がっている。資質向上に不可欠な研修受講については、園内研修のさらなる充実と外部研修の自主的積極的な受講を促進したい。